巻頭言

社会保険山梨病院　呼吸器内科
石原　裕

遠藤周作の「沈黙」はキリシタン禁制となった江戸時代初期の日本に、迫害を受け指導者を失い孤立している日本人信徒を救うべく潜入したポルトガル人の司祭が捕らえられ棄教する話である。主人公は度々の棄教の説得にも応じなかったため遂には処刑されるべく汚物の詰まった暗い囲いに閉じ込められる。その晩死を覚悟し、自分がキリストと同じ運命を分かち合うという喜びに浸っていた司祭の耳に誰かの鼾が聞こえてくる。自分の運命と不釣り合いな音に笑い、また、腹を立てるが、それは穴吊りにされている日本人信徒たちの呻き声であると知らされる。信徒たちは既に踏み絵を踏んでいるのに司祭が転ばないために逆さ吊りにされ、両耳の後ろにあけられた穴と鼻と口とから血を流しながら呻いていたのだった。

言葉はしばしば真意を伝えない。耐えがたい拷問を受けている人の苦しさのあまりに漏らす声が酒に酔って寝ている人の滑稽な鼾に聞こえてしまう。そのように、日々の診療でも注意しないと患者の切実な訴えが我々には鼾のように聞こえてしまうことがありうる。

自分が棄教すれば信徒たちが助命されるのにそうしないのは、自分は信仰を棄てなかったという自己満足のため、あるいは教会の汚点となることへの恐れでしかない。司祭は遂に踏み絵に足をかける。

ガイドラインやＥＢＭを教会の教義のように考えていないだろうか。それが目の前の患者に適用できるか否かは慎重に判断するべきであろう。